

岡山県 Y・ボード担当が思う これからの臨床工学技士とは?

- 佐々木 新¹⁾、横田 真也²⁾、小川 真由子²⁾、植田 友希²⁾、草地 将稔²⁾、
山田 健留²⁾、田中 昭彦²⁾

1) 一般社団法人 岡山県臨床工学技士会 岡山県 Y・ボード担当

2) 一般社団法人 岡山県臨床工学技士会 Y-CUP委員会

一般社団法人岡山県臨床工学技士会には、若手技士が主体の Young Challenge Up 委員会(以下、Y-CUP)がある。Y-CUPは若手を中心に様々な取り組みを行い、それによる個人のレベルアップ及び技士会の活性化を目的に活動している。

主な活動として、『Y-CUPミーティング』と題した若手が企画・構成・運営を行うセミナーと、一般市民へ向けたCEの普及啓発活動の一つである『病院ごっこ』がある。

Y-CUPミーティングは、学術分野などにとらわれず若手が興味のあること、知りたいことをテーマに企画してきた。過去には、各施設やメーカーで働く技士の業務紹介や、若手・中堅・ベテランといった各世代が描く将来像などをテーマにした他、社会人マナーとしてノンテクニカルスキルや接遇に関すること、時と場合に応じたスーツの着こなし方など、若手に役立つテーマを取り上げた。その他、時事問題として災害対応や防災、ボランティア活動について企画した。

病院ごっこは、第3回中四国臨床工学会で開催して以降、毎年、夏休みの時期に合わせ行っている。毎回、会場内に手術室や透析室、呼吸治療など医療機器が体験できるブースを設け、子どもたちがCEの仕事を楽しみながら体験できるよう企画・運営してきた。中には、子どもよりも付き添いの保護者の方が積極的で、進路や就職先などの質問を頂くことがあり、昨年からは進路相談ブースを養成校の協力のもと設置し対応している。

その他、他委員会主催のもと開催される宿泊セミナーや運動会などのレクリエーション実施の際は、積極的に関わるよう努めてきた。

10年前からY-CUPの活動が始まり、それによって若手の横のつながりや縦の関係が持てるようになった。これら交流の必要性として、CEは他の医療職種に比べ若年層の割合が高く、未来を見据えた場合に若手の団結が必要不可欠であると考え、CEの業務を見ると、チーム医療推進や機器の高度化など、医療を取り巻く環境により変わってきており、今まで以上に個ではなく組織の力で柔軟に適応していく必要があると考える。

今回、これまでのY-CUPの活動を振り返ると共にそこから得られた成果を考察し、今後のCEの展開について、技士会活動とCE業務の二つの視点から述べたい。

広島県Y・ボード担当が思う これからの臨床工学技士とは?

前田 哲典

一般社団法人広島県臨床工学技士会 広島県Y・ボード担当

今回の若手委員WSでは、「当県の人材活性化委員会の活動内容」、「職場、技士活動を通して感じる今後の臨床工学技士について」の2点を述べる。まずは活動内容について報告する。当県では、Yボード活動により力を入れるべく、「若手委員会」から「人材活性化委員会」に名称を変え、委員も1名から5名と増員し活動を始めた。活動目的としては、「今後を担う若手技士の発掘と知識向上」、「他施設との交流を図る為の場を提供する」である。活動内容としては、1月に新年会を開催、5月に勉強会を開催、7月に当県の透析療法セミナーとの合同企画で若手技士を対象としたセッションの枠を設け、8月頃にCarp観戦交流会の開催である。

各活動の詳細としては、新年会は今まで開催していた事業を人材活性化委員会が受け継ぐ形となった。5月の勉強会は「スーツの着こなし方」のテーマに基づき、学会等で着用するスーツの着こなし、社会人としてのマナー向上を目的として開催した。参加者は入職3ヵ月から5年目の会員、さらに学生の参加も多くみられた。7月の勉強会合同企画は、若手技士の学術参加、発表のための内容とし、「学術の手引き」、「統計学」をテーマとした。

8月の交流会は、若手委員会の頃から開催しており、今年で第3回目である。当初のテーマとして、ただ交流を行うのではなく、広島県民のアピールポイントでもある「広島東洋Carpの試合を観戦しながら交流を行えば、共通の話題から会話が弾むのではないか」と考え開催した。現在は、開催時期が近付くと今年も開催しますか?と問い合わせがあるくらいまで人気の交流会となっている。

今後の臨床工学技士については、現在臨床工学技士が業務に関わることで取れる医療加算「独占業務」は極わずかであり、現職の臨床工学技士の大半が関わる透析分野においても独占業務がないのが現状である。つまり臨床工学技士の業務は、他職種でも行える業務が多く、臨床工学技士そのものが不必要と捉えられても不思議ではない。今後、臨床工学技士が生き残るためには専門性を活かし、在宅医療など確立していない分野での独占業務を増やしていくことが重要な課題と考える。このような現状を我々人材活性化委員会は、知識向上だけでなく、今後どうすべきかを多くの若手技士に伝え、自ら考える場を提供する活動をしていきたい。

鳥取県Y・ボード担当が思う これからの臨床工学技士とは?

小谷 友喜

一般社団法人鳥取県臨床工学技士会 鳥取県Y・ボード担当

当県のY・ボード活動は活動内容がCEの認知度向上や技士間の交流など広報委員会と大きく重複することもあり、広報委員とあわせて行っているという特徴がある。

主な活動内容は呼吸・循環・代謝の各セミナーでの広報ブースの設置を行い他職種や会場へ通りかかった一般の方への広報活動、中学校への職業紹介、今年度より小中学生を対象としたキッズセミナーを行っており外部広報に力を入れている。他にも若手中心の親睦会も行っている。現在、技士会新聞を発行し各施設の業務やスタッフ紹介、賛助会員の製品紹介などを企画しており、技士会内部の繋がりを強めていけたらと考えている。今後は鳥根県臨床工学技士会との交流を深め、山陰両県で協力してY・ボードならではの企画を行いたいと思っている。

また、昨今の働き方改革について医師の負担軽減が話題にされることが多い。これは我々CEの業務拡大のチャンスになりうるが、それは他のコメディカルも同じである。業務指針による職域に拡大についてはY・ボードの話から逸れるため、ここでは別視点で考えてみたい。

それでは業務指針などではなく、各施設で行える業務拡大に必要なことは何であろうか。医師の負担軽減に対し我々CEが行える業務は多いと思われる。そのためには各種学会や勉強会へ参加し知識を深めるだけでなく、医師や他のスタッフとの間でCEに対する信頼関係を築くことが重要だと思われる。そのためには患者さんや他のスタッフへの接遇やコミュニケーション能力を身に着ける必要がある。今後はそういった内容の勉強会や講習、親睦会を通してノンテクニカルなスキルを身に着ける場を提供する事がY・ボード活動の要点となっていくのではないかと考えている。

島根県Y・ボード担当が思う これからの臨床工学技士とは?

福島 成文

一般社団法人島根県臨床工学技士会 島根県Y・ボード担当

当県がおこなっているY・ボードの活動として、若手CE同士の交流や育成、CEの認知度アップがあげられる。具体的な活動内容としては、昨年度から教育担当と協力し、一般市民を対象にした「臨床工学技士体験イベント」を実施している。これは医療系国家資格の中でも認知度が低い臨床工学技士の仕事内容を知ってもらい興味を持ってもらおうという趣旨で取り組んでいる。イベントには小学生から大人まで幅広い年齢層の参加者があり、臨床工学技士の認知度アップが期待される。また、Y・ボードの企画として、社会人として働くうえでの一般常識、ビジネスマナー講座を中心に学術とは異なった視点でのセミナーを開催し、若手CEのレベルアップを図っている。最近はインターネット、SNS等が普及し、直接顔を合わせて情報交換をする機会が少なくなっているように感じる。若手CEが気軽に顔を合わせて情報交換ができるような親睦会を開催し、各施設間の繋がりを深めてもらっている。ここ数年では5年未満の若手CEが積極的に参加する傾向にある。今後は隣県とも協力し、合同でおこなうイベントも企画していきたいと考えている。

過疎化が進んでいる当県では、少数のCEで業務をおこなっている施設が少なくない。そのような施設においてもCEの業務は多岐にわたっており、各専門分野を幅広くカバーできるCEの存在が重要となる。一方で、臨床現場のニーズとしては、日進月歩の医療に対応できるような専門性の高い知識と技術をもつスペシャリストが必要とされている。今後、各専門分野での業務拡大も視野に入れると、常に新しい知識や技術を習得し、業務を確立していくことが不可欠である。また、患者や他の医療スタッフと連携し、医療チームの一員として活躍するには、マネジメント能力、コミュニケーション能力が必要とされるため、このような視点から技士会活動を進めていけたら良いと考えている。

今回のワークショップを通じて、これから活躍する若手CEに必要なことや目指す将来像について、今後の技士会活動の方向性について意見交換したいと思っている。

山口県Y・ボード担当が思う これからの臨床工学技士とは?

末廣 孝太郎

一般社団法人山口県臨床工学技士会 山口県Y・ボード担当

【山口県の若手活動について】

「いのちのエンジニア体験会」

医療機器を実際に触ってもらい臨床工学技士を体験できる子ども対象のイベントである。山口県では5月5日の子どもの日に毎年行われるイベントに参加する形で2度開催した。日時と場所が2回とも同じであるため比較しやすい。1回目の参加者は246人、スタッフ数は31名(技士18名、学生13名)、2回目の参加者は589名、スタッフ数は25名(技士10名、学生15名)であった。参加者のリピーターは全体の5%であった。スタッフは減ったが参加者は大幅に増えた。1回目は当会会長や理事にもスタッフとして参加してもらったが、2回目は若い技士(20～30代)のみで行った。今後は若手のみで運営する事でチームワークを高めていきたいと考える。

「サマーキャンプ」

福岡県と合同で毎年夏に行っている一泊二日で行う合同事業である。今年で6回目となる。山口は海、福岡は山と開催地を交互に変えながらキャンプ地で行っている。昼過ぎに集まり勉強会を行い、夕方から親睦会、朝にはカレーを作り反省会を行い解散する流れとなっている。KJ法によるWS、論文の作り方WS、災害対策WS、痰吸引実技講習などを行った。これまで一泊二日で行う事、野外で行う事を基準に行ってきたが若手技士のニーズに合っていない事が参加者アンケートにより判明した。次回開催は半日で終了するように計画しキャンプ地での開催も中止し、講習会の呼び名も「サマーキャンプ」から「夏期講習」へと変更した。若手のニーズに合った勉強会内容や開催場所を考え参加しやすい環境を整え、これからもブロックを越えて親睦を深めていきたい。

【職場や技士会活動を通じて感じる、今後CEの業務がどのように変化するか】

これからのCEはスペシャリストではなくジェネラリストである事が求められてくると考える。

香川県Y・ボード担当が思う これからの臨床工学技士とは?

石川 朋宏

一般社団法人香川県臨床工学技士会 香川県Y・ボード担当

現在、臨床工学技士の業務内容は年々拡大している。当院でも平成26年度診療報酬改定に基づき、昨年より臨床工学技士の24時間常駐のための日勤・夜勤業務を開始した。しかし、その他の業務拡大に伴い日常業務における臨床工学技士の人手不足を感じている。そして、こういった人手不足は他院でも同様ではないかと考えており、原因の一つに臨床工学技士の認知度不足が関係していると思われる。

そこで、技士会活動として臨床工学技士の認知度を高めるために若手CEが中心となって、「体験!病院で使っている医療機器に触ってみよう!」という体験イベントを行っている。イベントの主な対象者は中学、高校生とし、その他通行人の方にもイベントに参加していただき、臨床工学技士の認知度を向上させ、将来就きたい職業の候補にしてほしいと考えている。また、技士会活動としてこういったイベントを企画していく中で意見を出し合い、話し合いを深めることで若手CE同士の連携を強めていくことができ、イベント参加者、企画者双方にとって、とても有意義であると考えている。

こうした技士会活動を通じて情報交換をしていく中で改めて感じさせられるが、近年の医療機器の進歩は目まぐるしく、より高度な治療が行われており、臨床工学技士の関わる業務も拡大してきている。そして、我々臨床工学技士はこれらの医療機器を保守管理し、安全に操作を行っていかねばならず、これからは今まで以上に広く深い知識と技術を持たなければならない。

愛媛県Y・ボード担当が思う これからの臨床工学技士とは?

野村 祐介

一般社団法人愛媛県臨床工学技士会 愛媛県Y・ボード担当

私が愛媛県Y・ボード担当に就任してから3年が経過した。当会の若手委員は現在5名で、年に3～4回委員会を開催し活動している。就任時より委員も増え、活動は年々活発になっている。委員会では企画(セミナーや交流会)を発案し、それぞれが役割を分担し、開催に向けて準備を行う。また委員会以外でも互いの情報共有のためにグループメールも活用している。このように徐々にではあるが組織的な委員会が構築されている。

【私が就任してからの若手委員会の活動内容】

- ・2015年8月、親睦会in道後の開催
- ・2017年2月、親睦会in松山の開催
- ・2017年10月、第1回Y-Boardセミナー～組織力↑とスーツの着こなし力↑でワンランク上のCEを目指そう!～の開催
- ・2018年8月、第2回Y-Boardセミナー～院内・外で役立つ接遇講座～(開催予定)
- ・2018年10月、交流企画～マツヤマお城下リレーマラソンに参加してみよう～(開催予定)

就任当初は親睦会の開催が主であったが、昨年は若手委員会が企画した第1回目のセミナーを開催することができた。本セミナーの内容は「技士会と連盟」そして「スーツの着こなし講座」について実施した。「技士会と連盟」については、それぞれの“役割”と“今後の臨床工学技士”について理解し、“どのような技士会活動が必要か?”, “連盟の必要性”を問いかける内容である。特に連盟の役割とその重要性について理解できていない会員は多く、とても意義のある講演であった。なお本講演は当会の会長に講演頂いたが、このような県内での取り組みについては会長や組織委員会だけではなく、次の世代である若手委員会も積極的に取り組んで行く必要があると考えている。また「スーツの着こなし講座」のように学術的な内容ではなく、“社会教育”の一環としての講演についても様々な場所・場面に遭遇したときに、社会人として恥ずかしくない常識のある臨床工学技士であるためにも重要な内容である。今年も第1回に引き続き、第2回のセミナーに“接遇・ビジネスマナー講座”を予定している。さらに今年は交流企画として松山で開催されるリレーマラソンに出場予定である。交流を深めることはもちろんのこと、臨床工学技士の認知度アップを目指した取り組みが出来ればと考えている。本ワークショップではこれまでの活動を通して得た、私の考えと今後の若手CEの活動について議論したい。

高知県Y・ボード担当が思う これからの臨床工学技士とは?

中川 弘之

一般社団法人高知県臨床工学技士会 高知県Y・ボード担当

高知県Y・ボードとしての目的は臨床工学技士の認知度向上、志望者拡大、施設間の繋がりの強化である。2年前までは親睦会を中心に活動していたが、一昨年に行われた中四国臨床工学会高知大会での臨床工学技士体験イベントを皮切りに、昨年よりY・ボード委員が8名に増え、本格的に活動を行っている。昨年度の活動内容として、高知県下の中学校・高校での職業紹介の授業への参加やチャリティー活動への参加を行った。中学・高校での職業紹介は臨床工学技士という名前さえ知らない学生達に対して行っており、今後彼らが将来を考えた時の選択肢の一つとして臨床工学技士があればと考えている。この活動が成果として表れ、実感できるのは5年先か10年先かは分からないが続けていきたいと思う。今年度は4月に「学術委員会では行わないようなセミナー」を目的にプレゼンテーションスキルについて講師を招いてセミナーを開催し、30名以上の参加があった。

Y・ボード活動を行っていて課題だと感じた事として高知県は地理的に東西に長く、総会や勉強会などは会員数の多い中央部で行っている。そのため、西部・東部の会員の参加が困難になっているのが実情である。中央部から離れた地域での開催など、今後検討が必要である。また、技士会入会促進にも力を入れたいため、施設間の交流や養成校との繋がりの強化も必要と考える。

昨今の臨床工学技士を取り巻く環境は刻々と変化し、私達臨床工学技士は新たな領域とそれに伴う新たな質が求められている。それらに対応できるように技士会も今まで以上に質の高い情報を提供する必要がある、それが会員一人一人のステップアップに繋がると考えている。今後の臨床工学技士は何を感じ、何を成すべきか、どうあるべきかを考え、高知県の臨床工学技士として特色を生かした活動を行っていきたい。

徳島県Y・ボード担当が思う これからの臨床工学技士とは?

竹内 教貴

一般社団法人徳島県臨床工学技士会 徳島県Y・ボード担当

臨床工学技士(以下、CE)は医療機器の安全性確保と有効性維持の担い手として誕生し、呼吸治療、人工心肺、血液浄化、手術領域や集中治療など、今日に至るまでに、多種多様な業務形態へと進化を遂げてきた。その中でも当県では血液透析業務に従事しているCEが特に多く見受けられている。これは当県が14年連続糖尿病死亡率ワースト1位という不名誉な記録を持っていたことから、地域としてCEにこの部分でのサポートが求められてきたという事実には他ならない。それに答えてきたからこそ現在の我々があり、専門性に特化したスペシャリストの人材育成に繋がってきたのだと考えられる。

このスペシャリストを有する徳島県臨床工学技士会では2014年に若手CEの育成と活動場の提供を目的に若手委員会が設立された。当初は活動するにあたり、試行錯誤を繰り返したが、血液浄化領域の基礎的研修会の開催や、CE認知度向上活動支援のためのオリジナルリーフレット作成などを経て、現在では若手CEだけで専門性を維持していくための企画検討ができるまでに発展した。

しかし、2025年問題などをかわきりに、国内での血液透析療法の在り方は議論が深められている。在宅医療や腎移植の普及が急がれる中、iPS細胞などの再生医療の活用やナノテクノロジーを用いたウェアラブル透析システムの構築など、血液透析業務は「慢性維持」から「一時的措置」へ、さらに「治癒」の領域へと歩みを進めようとしている。つまり、我々がこれまで築きあげてきたものが大きく変わろうとしているのである。

では、我々がこれから成していくべきこととは何なのか?「治癒する」ということは、我々が介入しなくてよい、つまり「必要でなくなる」といえるのかもしれない。そうなってしまえば、血液透析業務を主に生業としてきた当県のCEは今後崩壊してしまう恐れがある。このような状況を打開するには、専門性に特化したスペシャリストではなく、総合的に周囲を見通し判断できるジェネラリストとしての能力を育てていくことが求められる。また、それには職能団体としての情報把握や協力体制、未来を創る若手CE同士のつながりをより密にする仕組みの構築が重要な意味を成してくるとも考えられる。

本項ではこういったCE業務の未来と共に、職能活動の意義なども踏まえて、これからの若手CEの在り方について議論を深めていきたい。